

研究

佐伯市戦後五十年史（一六）

池田市政と

産業・都市基盤の整備――

矢野 彌生

（会員 佐伯市中山区）

〈前号〉

一五 池田市政と産業・都市基盤の整備

（一） 第一次産業

一六 池田市政と産業・都市基盤の整備

（二） 第一次産業（続）

〈木立いちご栽培に貢献した黒岩さん〉 当時の県下のいちご栽培に貢献した木立の黒岩仁蔵さん（四一）は佐伯市の農業史に残るすぐれた人である。黒岩さんについて、当時の新聞報道では次のように紹介している。

昭和三十五年（一九六〇）までは水稲としいたけ

だけだったが、「現金収入を得るにはたばこがよい」ということで、同年からたばこを十五^ル導入、それ以来



黒岩さんといちご
（昭和52年4月）

栽培面積を増やし続け、四十七年には八十^ルまでに達した。しかし、たばこは水稲（早期米）と労力が競合する。四十年に経営を任されてからは、労働生産性の高い施設いちごに注目、この地域では最初に五^ルを導入。その後次第に経営の中心をたばこからいちごに移し、いちごが軌道に乗った四十八年にはたばこを全面的にやめた。現在では二百二十八^ル（うち二十^ル借地）の耕地でいちご二十三^ルと水稲を栽培している。中心のいちごは十^ル当たり二・九五^トの収穫で、粗収益は四百二十九万円。他にしいたけ（年間千^キ）と水稲（七・四^ト）があり、年間粗収益は六百万円を超えている。黒岩さんがいちごに踏み切った当時は、

露地栽培が多く、雨が降れば腐り、出荷体制が整っておらず、個人売りが中心だった。このため、早くから施設栽培をやっていた挾間町や宇佐市四日市地区など視察してハウスの有利性を確めて導入した。その後も研究を重ね、市内で最高の技術水準を保ち続け、年々十^キ当たりの収量を向上、いまでは市内平均（二千三百^キ）を六百五十^キ。上回る地域の模範的農家。しかし、一昨年から一部（七年連作田）で連作障害が出始めたため、土壌のガス消毒、ハウス内の水を張る高温消毒を行うほか、酪農家のたいきゅう肥を投入するなどして地力の維持に努めている。特に昨年から連作障害対策を兼ねていちごの後作に五月出荷のスイカ（早生日章）を取り入れ、土地の利用率を高める努力も市内の農家に先がけて行っている。今後は原木不足が続くしいたけ部門を縮小し、その分だけいちごの規模拡大をはかり、最終的にはいちごを四十^キにする計画だという。また黒岩さんは個人として篤農家であるばかりではなく、四十三年には木立いちご生産同志会を組織して副会長に就

任。団地の基礎づくりのため、四十^キ四^キ五年には経営拡大事業を導入して団地の規模拡大をはかり、県の団地指定を受け、四十六年に会長に昇格。当時四^ヘだった団地規模を現在の十四^ヘに拡大、出荷体制も整備して、木立いちごの産地基盤を確立した。昨年はスイカ同志会も設立するなど、地域農業振興のリーダーとして活躍している。いちごで県農業賞

第10表 保有形態別林野面積

(単位：ha、㎡、%)

第10表 保育形態別林野面積

区 分	立 木 地				無立木地	その他	合計	人工林率
	人 工 林		天 然 林					
	面積	蓄積	面積	蓄積	面積	面積		
国有林	2,619	120,000	1,815	187,000	71	77	4,582	57.2
公有林	338	24,000	128	13,000	3	0	469	72.1
私有林	5,060	724,000	4,838	465,000	80	79	10,057	50.3
合 計	8,017	868,000	6,781	665,000	154	156	15,108	53.1

(農林水産課資料による)

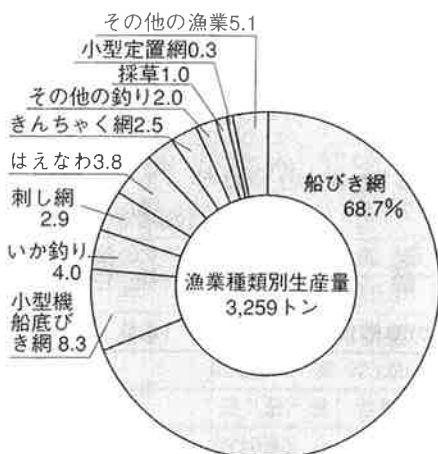
五十四年度の生産状況の対比でみると、一般用材が伸びているほかはほとんど変化がなく、林業の発展のためには、今後いつその振興策がとられる必要がある。

佐伯市の林業団体としては、佐伯市森林組合があり、組合員一六八一人を擁して、指導・販売・購買・利用金融等各方面にわたる経済事業を実施している（第15表参照）。

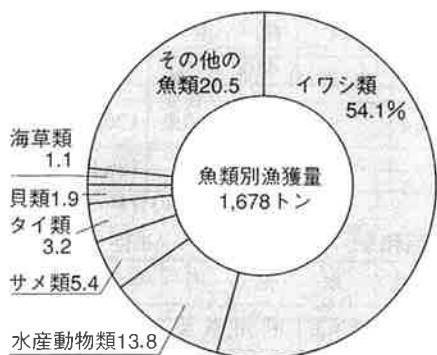
水産業

太平洋の海底が北に向けて徐々にせり上がり、ほぼ二〇メートルの水深になったところから豊後水道である。その入口に、東に向って、湾口をひろげる佐伯湾である。

この海域では、北上する黒潮暖流と南へ流下する瀬戸内冷水が混合してプランクトンが発生し、これを捕食する各種の魚類が蜻集するため、古くから刺し網や延縄漁業が発達した。また、沿岸は複雑なりアス式海岸



第3図 漁業種類別生産量 (昭和50年)
 (『大分農林水産統計年報』により作成)



第4図 魚種別漁獲量 (昭和53年)
 (『大分農林水産統計年報』により作成)

で、これを形成する湾入部は、魚介類の好個の繁殖場となってきた。

このため、佐伯市は長く漁業の中心地として繁栄したが、高度成長時代公害等の多発によって深刻な漁業環境の悪化をみるに至った。

最近では、公害対策等の進展によって海域の浄化がはかれ、往時の状況に復しつつあるが、装備の近代化にとりもなう漁獲能力の向上によって、漁業資源枯渇が深刻に憂慮されている。



船びき網（いりこ漁）
（『市勢要覧』昭和44年より引用）

第16表 漁船数 （単位：隻、トン）

地区別	動力船		無動力船 船外機付船	
	隻	トン	隻	隻
大入島	164	4,429	43	7
佐伯	66	1,475	48	73
計	230	5,904	91	80

（1970年漁業センサスによる）

海面漁業（佐伯湾の漁場として成立）いま、昭和五十
生 産 年（一九七五）、同五十三年の佐伯市の海面
漁業生産の状況を見ると、第3図・第4図のとおりであ
る。漁業種類別生産量をみると、第3図で明らかなよう
に、船びきが漁業生産量の六八・七_{パーセント}を占めて圧倒的
に多いことが分かる。次いで小型機船底びき網八・三_{パーセント}、
いか釣り四・〇_{パーセント}、はえなわ三・八_{パーセント}、刺し網二・
九_{パーセント}、きんちやく網二・五_{パーセント}などが主なものである。
これらのことから佐伯市の海面漁業は佐伯湾を中心と

第17表 漁業従事者ならびに漁獲高

（単位：経営体、人、万円）

（佐伯市）	経営体数	最 盛 期 従 事 者			漁 獲 金 額
		総 数	家 族	雇 用 者	
総 数	113	266	189	77	7,161万
漁業経営のみ	20	58	32	26	1,930
漁業経営が主	33	211	60	51	4,641
漁業経営が従	60	97	97		590
会 社 経 営	1	25		25	1,650
共 同 経 営	2	76	9	67	330
計	116	367	198	169	9,141
（大入島）					
総 数	145	388	237	151	14,611
会 社 経 営	6	76	8	68	620
計	151	464	245	219	15,231
総 計	267	831	443	388	24,372

（1970年漁業センサスによる）

した漁場で成立していることである。

さらに、魚種別漁獲量を第4図でみると、全漁獲量の五四・一^{パーセント}はイワシ類が大半を占めて多く、水産動物一三・八^{パーセント}、サメ類五・四^{パーセント}、タイ類三・二^{パーセント}、貝類一・九^{パーセント}、海草類一・一^{パーセント}となっている。

〈漁業の主役は大入島〉 漁船数をみると、第16表のとおりである。すなわち、地域別にみると、大入島一六四隻、佐伯地区六六隻で、大入島が全体の七一・三^{パーセント}を占めて多いことが分かる。

また、第17表で、漁業従事者及び漁獲高をみても大入島が一四五経営体、佐伯地区一一六経営体となっており、大入島が全体の五四・三^{パーセント}を占めており多い。漁獲金額をみても大入島一億四六一万円、佐伯地区九一四一萬円で、大入島が圧倒的に多いことが分かる。

以上みてきたように、佐伯市の漁業の主役は大入島であることは明らかである。

各地に深い入江をもつ佐伯湾は、漁港の数も多く、佐伯市が管理している漁港は八港で、いずれも第一種漁港に指定されている。このうち、大入島に大入島・片神・高松・日向泊・塩ヶ谷の五港があり、本土側に、二栄・

護江・霞ヶ浦の三港がある。いずれも沿岸漁業に従事する地元漁船の基地として使用されている。

〈ほとんどの漁港が整備不十分〉 漁港は基地としての施設には、外郭施設・岸壁施設・泊地等の基本施設のほか、漁船保全施設・集荷施設・給油水施設等の機能施設が必要であるが、佐伯市の漁港は規模が小さく、整備の進捗度も低い。機能施設にいたっては、ほとんどの漁港の整備不十分である。

とりわけ本土側にある三港については、漁港としての基本施設さえも不足しており、漁船を道路護岸に繋船している状況である。離島振興事業のなかで改良がはかれる大入島側との格差があらわれている。⁽⁸⁸⁾

真珠養殖
〈養殖真珠にかけ

る佐伯市の大島さ

ん〉大分県の真珠養

殖が最初に導入され

たのは佐伯湾の霞ヶ

浦でそれは昭和二十

五年（一九五〇）で



年々生産量を増やしている
大島さん

を取り戻した大島さんは五十年、思い切つて佐伯湾内の大入島周辺と上浦町の浅海井沿岸に大養殖場（約一万八千方メートル）を新設、本格的に真珠養殖を始めた。県水産試験場に通い、新知識を仕入れる一方、貝にはびこる害虫を取り除くシャワー式の機械を購入するなど工夫を重ねた。この結果、四十五年ごろ、三貫（一一・二五[＊]）しか生産できなかったのが、五十二年には十貫（三十七・五[＊]）に増加。年間の売り上げも二千万円に達している。昨年の入札会で出品した五点の真珠が

第18表 佐伯公設水産市場取扱高の推移

（単位：万円）

年次 月	50	51	52	53	54	55	56
計	120,363	186,391	234,813	221,871	245,302	190,932	188,263
1	—	11,793	14,318	13,719	14,460	10,727	13,388
2	—	13,205	13,384	13,026	13,436	15,460	12,869
3	—	14,481	20,511	19,674	18,654	19,986	17,076
4	開設 14,054	15,385	23,801	18,101	17,336	16,386	16,618
5	11,288	16,359	18,767	18,262	22,977	16,443	15,732
6	9,400	15,406	18,717	19,090	19,842	14,658	15,357
7	10,849	14,853	18,788	19,471	24,743	15,179	15,125
8	12,722	18,616	23,502	22,639	23,280	14,252	15,329
9	16,106	17,798	22,980	19,732	23,805	14,396	14,334
10	13,235	14,962	19,884	20,129	23,285	15,737	15,031
11	14,798	13,769	18,014	16,150	19,859	14,127	14,674
12	17,911	19,764	22,147	21,878	23,625	23,581	22,730

（資料：商工観光課）

第19表 漁獲物の出荷先と出荷方法

事項 漁協	出 荷 先	出 荷 方 法
佐 伯 市	佐伯市場 養殖魚類（ぶり等）については福岡 北九州 本州	養殖は養殖業者の車
西 上 浦	佐伯市場 一部大分・別府市場 養殖（ひおうぎ貝）は福岡	別府・大分市場は自家用車または 輸送業者 養殖は購入者の車

（資料：豊後水道南部海域総合開発事業調査報告書）



佐伯市公設水産地方卸売市場
 (『市勢要覧』1977年より引用)

県漁連協会長賞を受賞、県下でピカ一の折り紙つき。大島さんは「佐伯湾でできる真珠は日本一という自負を持っていて。これまでの苦労がようやくむくわれているのでしょう」と喜色満面だ(『大分合同新聞』昭和五十三年九月十五日版)。

漁業 佐伯市には、はじめ大入島・大入島団・佐伯・霞ヶ浦・西上浦の五漁協があったが、西上浦を除く四漁協が昭和四十四年(一九六九)に合併し、佐伯市漁業協同組合を組織してからは二漁協体制で今日に至っている。組合は、信用・販売・購買利用・指導などの経済事業を中心に運営されており、その財源は各種の利息・手数料等に依存しているが、最近各種事業に伸びがみられるなど、組合員の経営に寄与する基盤づくりが進みつつある。⁽⁸⁹⁾

流通 (昭和五十年に公設水産地方卸売市場を設置) 体制 佐伯市は昭和五十年(一九七五)に公設市場を設置して、取引・流通の円滑化をはかってきた。新市場は、立地に恵まれて諸設備が整備され、衛生環境がよく、鮮度を落さずに取引ができるなど好条件を備えている。漸次取扱高の増大がみられた(第18表・第19表参照)。しかし、昭和五十五年四月鶴見町にも市場が開設されるに及んで、一時的な減少を余儀なくされた。現在では、年次計画による野津地区・津久見地区等への買受人の拡大あるいは集荷努力など流通機能の一層の改善をはかった結果、取扱高増大の徴候が徐々にみえはじめた。佐伯市から他地域への出荷にあたっては、国鉄はほとんど利用されず、国道10号線と佐伯・宿毛フェリーの二ルートの果す役割は大きい。とりわけフェリーは、四国や近畿以東と本地域を結ぶ動脈として、その重要性は国道10号線に劣らない。⁽⁹⁰⁾

【注】(85)『佐伯市総合計画・一九八三』(佐伯市)

- (86) (85) に同じ
- (87) (85) に同じ
- (88) (85) に同じ
- (89) (85) に同じ
- (90) (85) に同じ